

べし。といへり。平次按ずるに、元和六年の時は、三壺記に、御本丸表・奥方の御屋形のみ焼失して、類火の屋形はなしと見ゆ、寛永八年の時は、御本丸の屋形悉く焼亡と載せられたれど、寶曆九年の火災記に、本丸御殿延焼の由記載す。右本丸御殿とあるものは、寛永八年の火災後、二一丸を居館とせられしかど、本丸にも新殿を造營ありて、寶曆の火災まで存在せしか。若しくは露地なる數寄屋をいへるならんか。右數寄屋は、寶曆九年災後殿閣未だ再造なしと來因概覽附録にいへり。寶曆五年國目附への答書にも載せず。本丸建坪四百坪、右は櫓並に長屋門の建坪に御座候。と載せたるのみ。但し天和元年幕府廻國巡見上使大關勘右衛門・内藤十之丞・中根左兵衛等三人金澤來着、金澤町奉行へ尋問に付答方の趣旨上書には、左の如く載せたり。

一、當城は山城に候哉平城に候哉与御尋に付、山城に而御座候由申上候。天守は無之哉与御尋に付、無御座由申上候へば、惣而天守無之候哉、昔は有之候哉与御尋に付、昔は御座候へ共炎上仕、其以後無之由申上候へば、只今は江戸にさへ無之由被仰候。今程二の丸に被成御座候様に御

聞及被成候。本丸には御家有之、御番人も有之哉与御尋に付、其通に御座候由申上候。櫓は幾つ有之候哉与御尋に御座候へ共、櫓之數覺不申由申上候へば、大方二三十も可有之哉与被仰候故、左様に可有御座候哉、しかと不存由申上候事。(餘條略之)

辛酉六月十六日

岡田 十右衛門

里見 七左衛門

右本丸に御家有之番人も有之哉との答に、其通りと載せたるに據れば、此の頃本丸に尙殿閣ありしか、追致すべし。

○本丸數寄屋跡

三壺記に、寛永七年に本丸の御露地に數寄屋仰付けらる。其の時鐵炮の者の内より、器量能き若者共百人をすぐり出し、諸の足輕役を赦免ありて、佃源太郎をば頭に命ぜられ、御直に召使はれ、何茂出頭しける。とあり。按ずるに、寛永七年は火災の前年にて、いまだ利常卿本丸に居館し給ふ頃なれば、本丸の露地にさる數寄屋をも命ぜられしと聞ゆ。三州志來因概覽附録にも、寛永八年火災後、公居を二一丸に轉す。此の前年庚午に本丸露地に數寄屋を造らせら

る。此の造作は五十人者・百人者に命ぜらる。是は相撲者なり。又之を鐵炮者とも云ふと也。寶曆九年本丸災後、殿閣未だ再造なし。とあるに據れば、右數寄屋は露地中に建築ありし故に、寛永八年の火災に遁れ、寶曆九年四月まで凡そ百二十九年存在せしを、四月十日金澤大火に延焼せしと聞ゆ。

○本丸軍備倉

本丸軍備倉は、干糶・鹽辛等軍糧用を貯へられし庫倉也。故に俗に鹽辛土藏と呼べり。此の庫倉建築の年曆、三州志等にも記載せずして、いまだ詳かならず。本丸松原中において、大破に及ぶといへども、明治廢藩の後まで存在せしを、明治六年陸軍省名古屋鎮臺の分營と成りたる後壊ちたり。或人曰く、右庫倉に貯へある鹽辛は、鮎の鹽漬也。其の鮎皆尺に近き鮎也。干糶・鹽辛等、貯用方として年々出來方被命定あり。國初以來の舊例なるべしと。武家耳底記に、利常卿の時味噌藏あり。今奥村市右衛門第地是なり。故に其邊を味噌藏町と云ふ。とあり。此の味噌藏も、軍備貯用の味噌を藏め置かると云ふ。按ずるに、越中國人官

永正運の農談に云ふ。唐干糶は、微妙公の時正保年中、高岡瑞龍寺を建立し給ふ時、山門の十六羅漢の像をば大明より御求めありしに、かの尊像を入れて渡しける箱をば藁にてつめ越したりしに、其の藁に糶の付きたるあり。其の糶を竹田市三郎拾ひとり、其の由言上しけるに、御糶の上糶の糶に極り、則ち射水郡二塚村又兵衛に下され、初めて當國に植えけると也。此糶米甚だ性和らかにして、病人にも忌まずと。故に寒曝にして團子に製すれば其の功多し。

といへり。富田景周の高岡山瑞龍閣記にも、正保丙戌山門落成。明曆中轉地再建。此門樓上安十六羅漢。蓋華工也或云。今中越礪波・射水二縣。有俗稱唐干一種糶米。土人口碑。遺羅漢海船載來時。以糶藁包之。其藁中餘一種。好事者種之。生者所謂唐干也。自是種至今云。と載せたり。或は云ふ。唐干糶は糶の一種にて、是をば唐干と呼べるは、微妙公その糶を軍備倉の干糶になさしめ給ふによるの遺名にて、此の糶はもと明國より送り越したる種也。故に唐干糶と俗稱するもの也と。

○天 守 臺